

令和6年度 第1回総合教育会議 議事録

日時 令和6年8月8日（木）午前10時～

場所 いわき市文化センター中会議室（1）（2）

第 1 回総合教育会議 議事録

1 日 時 令和 6 年 8 月 8 日（木） 午前10時～午前11時30分

2 場 所 いわき市文化センター中会議室（1）（2）

3 出席者 いわき市長 内田 広之
いわき市教育長 服部 樹理
いわき市教育委員会 委員 根本 紀太郎
いわき市教育委員会 委員 宮澤 美智子
いわき市教育委員会 委員 小峰 美保子
いわき市教育委員会 委員 阿部 武彦

4 内 容 義務教育学校について
(ゲストスピーカー)
大崎市立古川西小中学校長 猪股 徳幸
大崎市立古川西小中学校教頭 菊田 淳

【会議内容】

1 開会

2 議事

会議設置要綱第 4 条の規定により、市長が議長となること、また、同要綱第 7 条第 2 項の規定による第 1 回会議の議事録への署名は、服部教育長及び阿部委員が行うことを確認した。

(1) 義務教育学校について

① 事務局説明（学校教育課 鈴木課長）

- ・ 義務教育学校は、小学校から中学校までの 9 年間の教育課程を作成し、柔軟なカリキュラムで指導を行うもので、小中一貫教育の一つである。
- ・ 児童・生徒の心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を基礎的なものから一貫して行う。
- ・ 平成 28 年 4 月に施行された「学校教育法の一部を改正する法律」により、義務教育学校が制度化され、創設から令和 5 年度までに全国で約 9.4 倍に増加している。
- ・ 福島県内では、平成 30 年 4 月に「郡山市立西田学園義務教育学校」が開校し、今年度までに 9 校が開校している。

- ・ 義務教育学校により期待される効果については、学習指導においては、中学校教員が小学校高学年の授業を担当するということがあるかと思う。
また、小学校の教員が中学校の授業において、担当教員とともに個別の支援を行うことができ、きめ細やかな授業が展開できると思う。
さらに、9年間の発達段階や育ちを見通した学びを実現することが期待される。
- ・ 生徒指導面においては、異学年の交流がとてもしやすくなる。また、教員同士で児童・生徒の情報を共有しやすくなり、継続的な指導ができることや、保護者、地域との協働関係がさらに強化され、児童・生徒が安心して学校生活を送れるなどの期待ができる。
- ・ 教職員や地域、保護者が連携して解決が図られるような取り組みをしやすい環境にあることから、課題解決の強みであると捉えている。

② 宮城県大崎市立古川西小中学校の概要説明（猪股校長・菊田教頭）

【猪股校長】

- ・ 今年度4月に義務教育学校の校長として赴任し、他校の校長から「大変でしょ？」と声を掛けられることが多々あるが、その際に「おもしろくて素晴らしい学校だよ」と回答している。
- ・ どのような点がおもしろく、また、素晴らしいと私自身感じているのかというと、小学生と中学生の交流において、小学生の純粋な眼差しとそれに応えようとする中学生の姿勢を見ることができ、小・中学生の心が日々成長しているとともに、毎日毎日、そういったものが積み上げられている。
- ・ 市長より、「義務教育学校の設置の可能性というものを視野に入れての検討」という話があったが、校長の立場で感じていることは、1つの学校として児童・生徒・教職員を見る目線と、2つの学校である小学校と中学校を預かっているという目線を持ち、学校経営を行っていかなければならないということである。
- ・ また、職員に求められることは、他校ではやっていないような新しい取り組みを多々行うことがあり、多かれ少なかれ、教職員には負荷がかかることから、義務教育学校の職員としての自覚と誇り、教師集団としての気概といったものが求められるのではないかと私自身は感じている。
- ・ 今後も様々な課題の改善に向けて具体の手立てを協議し、より良い学校づくりに励んでまいりたい。

【菊田教頭】

- ・ 私は、義務教育学校を開校する前年、閉校する学校の教頭として勤務し、昨年度、義務教育学校の開校に携わったが、1つの学校の終わりと始まりに立ち会えたことは、自分の教員人生の中でもすごく価値のあることだと感じている。

- ・ 今日、義務教育学校として開校した昨年度の一年間の取り組みと今年度の3カ月の中で感じたことを説明する。
- ・ 大崎市は、宮城県北西部に位置し、人口約12万人で、宮城県内では、仙台市、石巻市に次ぐ第3の都市である。また、「大崎耕土」という世界農業遺産に登録されている米所である。
- ・ そのなかで、古川西小中学校は、大崎市の中央部である旧古川市の西端に位置し、大崎市初の義務教育学校として、4つの小学校と1つの中学校が統合して、昨年度の4月に開校した。
- ・ 今年度の児童・生徒数は329名で、前期課程は208名、後期課程は121名となっており、学級数は19学級となっている。
- ・ 「共に学び 高め合い 夢に向かって未来を拓く 児童生徒の育成」という学校教育目標を掲げ、発達段階を3つのブロックに分けた、4－3－2制で、教育課程を展開している。
- ・ 大きな特徴の1つ目としては、「リーダー性の伸長」が挙げられる。
- ・ これまでは、小学校では6年生、中学校では3年生の2回、リーダー経験を積むことができたが、義務教育学校の4－3－2制では、4年生、7年生、9年生でブロックのリーダーとしての経験を積む活動を設定することができる。
- ・ 具体的には、4年生では、前期ブロックで行われる児童朝会や集会活動、また、前期ブロックの児童たちが気持ちよく生活することができるように組織する「ミニミニ委員会」の取り組みを通してリーダーへの経験を積んでいる。
- ・ 「1年生を迎える会」については、通常の学校だと5・6年生の児童会が企画・運営を行うが、本校では、前期ブロックのリーダーである4年生が全て企画・運営しており、1年生にインタビューを行う際、きちんと膝を折って1年生の目線に合わせる姿に我々教員も心打たれた。
- ・ 7年生では、中期ブロックでの集会活動、また、1年生から7年生までで「縦割り清掃」というものを行っており、リーダーとして取り組んでいる。
- ・ 本校は、自分の教室は自分で掃除するのではなく、1年生から7年生までは縦割り班をつくり、決められた分担区に行き、グループで清掃活動を行うが、活動が円滑に進むように、7年生が役割分担し、1年生と4年生がペアになって机を運ぶなど声掛けをしながら清掃活動を進めている。
- ・ 9年生では、学校全体に関わる児童生徒会の運営を中心に、様々な場面でリーダー経験を積んでいる。
- ・ 本校は、児童生徒会総会に、中期ブロック以上の5年生以上が参加しており、中学生だけでは出てこない質問がなされ、それに受け答えをする9年生

の姿を見て、すごくいい学校だなと思いながら、教員たちは笑顔で見守っている。

- ・ 特徴の2つ目としては、「異学年交流はお互いの成長の場にできる」ことが挙げられる。
- ・ 異学年交流の機会は、上級生から見ると、「一緒に活動したい」「声を掛けてあげたい」「教えてあげたい」「助けてあげたい」と、思いやりを持つ場、下級生から見ると、「一緒に活動したい」「声を掛けたい」「カッコいい」「あのようになりたい」といったあこがれを抱く場となる。
- ・ 入学式には、5年生以上が参加し、9年生が1年生の手を引いて入退場の補助を行った。今年の9年生は、手を引いて入場させた後、1年生を椅子に座らせて、目線を合わせるようにかがみ、「頑張ってるね」などと声をかけている姿が見られたが、私は、その場面が一番印象的で、1年生と9年生という大きい年齢差ではあるが、異学年での関わりを持てることが素敵なことだなと感じている。
- ・ 卒業式にも、5年生以上が参加し、5・6年生は、「威風堂々」という曲を演奏するほか、会場には、卒業式に参加できない1年生から4年生までのメッセージを掲示している。
- ・ 運動会は全校で実施し、前期課程は徒競走、後期課程はリレーに参加するほか、学年種目を実施している。本校の大きな特色としては、4年生、7年生、9年生をリーダーとしたブロックごとの応援合戦を行っている。
- ・ 文化学習発表会では、1年生から6年生までの演技を全校で観覧し、一般公開では、7年生から9年生までの演技を5・6年生も参加して観覧している。
- ・ 運動会及び文化学習発表会とともに、行事を児童・生徒達が一丸となって作り上げるという視点での関わり合いが、大変意義深いものになっているほか、5・6年生は、後期課程の具体的な姿を見て、自分達の数年後の活動がイメージできるというところが本校の強みであると感じている。
- ・ 中総体激励会では、5・6年生も参加して選手へエールを送り、学校の花壇への花植えについては、2年生と8年生が一緒に行った。
- ・ 水泳学習は、1年生と9年生、3年生と9年生が一緒に行っている。
1年生については、最初にプールに入る入門期のところで、水慣れを9年生と一緒にすることで安心感を持ちながら入ることができ、3年生・9年生については、お互いのめあてを持って取り組めることから、ただ「お世話する・される」の関係ではなく、学び合う関係をつくる一例になっていると感じている。
- ・ 特徴の3つ目としては、「中1ギャップの解消につながる」ことが挙げられる。

- これまでの6－3制では、中学校入学からの教科担任制の導入、部活動開始、校則などの学校生活のきまりの違いなど、学校生活上大きな変化があり、この変化に対応しきれない生徒に大きなストレスを与えることにもなっており、それが、学校への不適応の要因となっていたが、義務教育学校では、そのギャップを数回に分けることで小さくすることができる。
- 本校では、中1ギャップの解消のために、1年生から6年生までを「一部教科担任制」、7年生から9年生までを「教科担任制」としている。
- 教科担任制は、1年生から学年が上がるにつれて少しずつ教科を増やし、複数の目で児童・生徒を見ることでその良さを引き出すことにもつながっている。
- また、外国語や音楽、体育などについては前期課程へ後期課程教員による乗り入れ授業を展開するほか、今年度は、道德の交換授業や、一部単元の交換授業、朝の会や帰りの会の担任ローテーションに取り組んでおり、専門性の高い指導を受ける大変充実した時間となっているほか、小学校担任については、複数教科の教材研究をしなくてよいことから、質の高い授業を実現することができ、様々な良さが校内に見られる。
- 生徒指導面においては、学校生活の決まりを全校で統一していることも、中1ギャップの解消に寄与している。
- ベースとしては、古川西中学校の決まりに準じているが、9年間の教育課程のなかで、発達段階に応じて考えなければならないことがあるため、本校では、毎週木曜日に「生徒支援会議」を行い、その都度、教員間で情報共有を行っている。
- これからの多様性を受け入れる社会を生きていく児童・生徒達にとって、たくさんのことを感じて考えるよい環境になるというように感じているとともに、まさにそのように教職員が児童・生徒達に投げかけていかなければならないという強い思いを持って向き合っている。
- それ以外では、5年生からの部活動体験や、5年生以上で同じ教育課程を組んでおり、後期課程の定期テストの期間については、5・6年生もミニテスト期間に設定し、中1ギャップの解消に努めている。
- ギャップを緩やかにする取り組みを行っているが、児童・生徒達の成長には適切なギャップも必要であると考え、節目として、7年生の4月には進級式を行ったほか、各ブロックでの節目も意図的に作っており、4年生では、前期ブロック修了式、7年生では立志式、9年生では卒業式を行っている。
- 4－3－2制で少し埋もれてしまう6年生の前期課程と後期課程の境目については、児童・生徒達や保護者の皆様の思いを大切にしながら、どういった活動をするかを検討しながら進めているところである。
- 特徴の4つ目としては、「教員の長期的な視野と連携による効果的な指導の実現」が挙げられる。

- ・ これまでは中学校へ入学すると知っている先生がいなかったが、昨年度感じたのは、後期課程の生徒が、これまで担任してもらっていた前期課程の先生方と話をしており、中総体へ向けて励ましの言葉をもらったり、悩みを話したりする場面が見られ、生徒が安心して頼れる先生が増えた。
 - ・ また、教員間でも児童・生徒達についての情報交換がよくされており、一人一人の実態をつかんだ指導につながっている。
 - ・ さらに、乗り入れ授業や校内研究などで、前期・後期課程の教員が話し合いながら指導を工夫しており、より効果的な学習指導が実現している。
 - ・ 本校では、校内研究のなかで自ら学び関わり合いながら問題を解決すること、特に協働的な学びに焦点を当てて学力向上に取り組んでいる。
 - ・ 前期課程のきめ細やかな指導、後期課程の専門性の高い指導、これらの授業を見合うことによって、教員全体の指導力が底上げされていると感じている。
 - ・ また、各種研修会の中でも、広い発達段階を踏まえた視点を持つことで、教員の資質向上に繋がっていると感じている。
 - ・ やはり、一番の研修の場としては、日常何気ない職員室内での会話、乗り入れしている授業の様子を見ての対話が本校の強みであると思う。
-
- ・ 大崎地域は、平成 29 年に、水田の水管理システムや伝統的な農文化等により、世界農業遺産に認定されたことから、本校では、全ての学年で「西学」と称した自然豊かな大崎耕土を学習材とした探究的な学習を行っている。
 - ・ 風雪から屋敷を守るために植えられた屋敷林である「居久根」の観察や保全活動、田植えや稲刈りなどの稲作体験、田植え踊りや豊作を祈念して奉納されるお神楽などの伝統芸能体験、地域の店舗と共同で米を使ったお菓子作りなど、地域の方に支えられながら意義のある活動を行っている。
 - ・ 開校時の校長である笹川校長からは、「大崎市初の義務教育学校だから、誰も見たことがない景色を見よう」と、そして、今年度赴任した猪股校長からは、「義務教育学校の強みを活かし、トライアンドエラーでいいから、いろんなことに積極的に挑戦しよう」という声をいただき、職員一丸となって取り組んでいる。

(2) ディスカッション

【市長】

- ・ いろいろなところに教育的な意図が込められたようなカリキュラムや学校行事、仕組みになっていると感じた。
- ・ 義務教育の小学校 6 年間と中学校 3 年間を 4－3－2 制に分ける仕組みが非常に素敵で、以前から、私も義務教育の小学校 6 年と中学校 3 年に分けることが時代に合わなくなってきたと感じていた。

- ・ 背景としては、日本の教育制度は、昭和 22 年に、アメリカの制度を参考につくられたものだが、戦後 70 年以上が経過し、児童・生徒の成長もスピードが速まり、また、インターネットやメディアも発達し、情報も早くなっている。
- ・ 小学校 1 年生から 4 年生ぐらいまではすごく幼いが、小学校 6 年生ぐらいからすごく大人に近づいてくるような状況で、小学校 6 年と中学校 3 年に分けるっていうことは非常にどうなのかなという疑問がある中で、4－3－2 制という分け方が、心と体の成長に非常に配慮した仕組みであると感じた。
- ・ 先生方の説明をお伺いして、情熱とやりがいを持って、何よりも楽しそうに学校活動を運営されていると感じた。
- ・ 今日は、高校生が傍聴しており、このようなお話が提供できる場となって私もよかったなっていると感じている。
- ・ 最近、学校の先生が「すごく忙しい・大変」というイメージのニュースが多いが、学校の先生のやりがいを伝えることができよかったと思うとともに、やはり行政としてもそのような発信もしなければならないということに改めて実感した。

【根本委員】

- ・ 異学年交流や中 1 ギャップの解消、教員の方のお互いのコミュニケーションが常々大事であると思っているが、今日は、義務教育学校の良さが伝わってきた。
- ・ ただやっぱり何事も良いことばかりではなく、課題もあるかと思うことから、課題についてお伺いしたい。
- ・ また、大崎市立古川西小中学校の 1 学級の定員は何名かお伺いしたい。
- ・ いわき市の場合は、小学校が 45 分、中学校が 50 分というように授業時間が異なっているが、前期課程と後期課程でどのようにしているかお伺いしたい。
- ・ 保護者の反応についてお聞かせ願いたい。

菊田教頭

- ・ 先ほど、鈴木課長からお話のあったように、学習指導・生徒指導等における「9 年間の系統性に配慮した指導計画の作成・教材の開発」や「年間行事予定の調整」については、本校においても課題と感じている。
- ・ そこを見越して、統合前から「教育計画」という学校全体の青写真を、統合前の教職員が集まって、市教育委員会の指導のもと一丸となって策定したが、やはりスタートしてみると計画通りに進まないことがたくさん出てきた。

- ・ 昨年度は開校1年目ということもあり、教職員にとっては多忙感もあったが、児童・生徒達にゆとりを持って関わられるような教育課程づくりを目指し、カリキュラムの整理や年間行事予定の見直しなどを行いながら、現在2年目の活動に取り組んでいる。
- ・ 統合時に危惧していたことは、4つの小学校が1クラスの人数が10人程度やそれ未満であったため、先生と近いところで学習を進めていた。
統合後は二十数人の学級になったことから、児童の学力について心配していたが、児童・生徒達からは、「義務教育学校になって、友達が増えてとても楽しい」、「勉強もいろいろな人の意見が聞けて楽しい」という声が寄せられている。
- ・ また、これまでは学習でわからない部分について先生に聞いていたが、対話的かつ協働的な横のつながりで、児童・生徒同士で教え合うことが広がっている。
- ・ このことから、「大人から教えてもらう学習者」という立場から、児童・生徒が自分でわからないことは友達に聞いたり、友達でもわからないことは先生に聞いたり、まさに学び方を選んでいくという「自立した学習者」という形になればいいなと思っており、今年度の校内研究ではこのような機会を多く設定していきたいと考えている。
- ・ 学級の定員は、文部科学省が定めているとおりで、現在、前期課程は35人、また、後期課程は、7年生は学校が変わったことを配慮し35人とし、8・9年生は40人で、他の自治体と差異はないと思う。
- ・ 本校は、1年生から9年生すべてが45分授業である。
- ・ ただ本来、後期課程は50分授業で1コマ扱いになっていることから、国が定める最低指導時数を担保できるように、コマ数を増やして指導を行っている。
- ・ 本校では、保護者アンケートを実施しており、約98%の保護者より、「児童・生徒が楽しく学校に通う」や「勉強が楽しくなっている」という回答があったことから、保護者にとっても義務教育学校になったことは肯定的に捉えていただいていると思う。
- ・ これについては、大崎市が、保護者や地域住民に対し、前もって丁寧に説明し理解を得ながら進めたこともあるかと思う。
- ・ また、統合後、学校が毎日、児童・生徒達の活動の様子をホームページに掲載し発信しており、保護者の安心感が得られていると思う。

猪股校長

- ・ 授業時間の統一については、市教育委員会と法的なものを含めて協議のうえ決めていることから、いわき市において導入する場合には、市・県と調整を図っていく必要がある。
- ・ 私が一番課題と感じていたことは、教職員の働き方であり、小学校については、一人の担任が一日中教えているが、中学校については、教科担任制のため空き時間があり、その空き時間のある先生とない先生が同じ職員室にいと、不平等感が生じ、不満感が高まる。
- ・ このため、本校では、中学校教員による専科指導を行う「乗り入れ」という授業を取り入れ、小学校教員の空き時間をつくり平等感を生み出している。
- ・ このような法的なところをうまく利用しながらやれることをやっていくことで、不平等感を減らしていくことが管理する側にとっては必要だと思う。
- ・ 年間行事予定の調整だが、中学校は6月に中総体、秋に新人戦があり、ちょうどこの頃、小学校では運動会や学習発表会がある。
- ・ このため、本校では、他校の小学校が運動会を実施している頃に学習発表会を実施し、秋に運動会を実施するなどのいろいろな工夫が必要になる。
- ・ 本校は、義務教育学校であり、どこよりも新しいことにチャレンジしていることから、職員には気概が求められており、昨年度は今年度以上に忙しい大変な一年だったと思う。
- ・ 今年は、それらを少しずつ整理整頓し、今後ずっと続けていけるように、継続的なものとなるよう調整していく時期に入っていこうと思っている。

【阿部委員】

- ・ 非常に大切なことを掘り起こしている学校だなと思う。
- ・ それはなぜかというと、地域に根付いている文化や産業、人間関係について、私たちもその地域に住みつつ、親の世代から自分の世代にバトンタッチされてきたものを次の世代にバトンタッチしているつもりであったが、全然バトンタッチができていない状況である。
- ・ 例えば、農業や産業の担い手なども地域の中にいなくなっている状況をもう一度掘り起こして、その地域のよい文化をきちっと伝える橋渡しをするような場所になっていることがとてもいいと感じた。
- ・ 市長が冒頭に説明した四倉地区は漁港で栄えた町で、その地に残っている祭りや、用水路がどのように整備されて稲作に使われているのかなど研究しがいのあることは山ほどある。

- ・ そのことをわかって自分のものにした児童・生徒達が、地域の次の世代に伝えていける場所として、そのような機会が生まれていったら、このいわき市の流れが非常にきちんと繋がっていくのではないかなと思う。
- ・ 教育の大きな使命として志のある方々が、そういうことを次の世代に繋げていき、また、大きな集団となっていくことがとてもいい試みで、いわき市にもやはりこういう学校がいくつも欲しいと思う。

【市長】

- ・ カリキュラムがあって、学年が上がるほど忙しくなるため、どうしても目先の受験になりがちだが、学力のベースに、自分達の地元の文化や風土、歴史、地域の課題を共有して考える思考力を身につけていく中で、受験学力と言われるものに繋がってくると思う。また、そういうものが本当の学びだと思う。

【宮澤委員】

- ・ 開校2年目で充実した学校の様子や先生達の想いが伝わってきた。
- ・ 今日のお話のなかで、小規模校の統合によって、児童・生徒達の新しい人間関係が構築されたことが非常によかったのではないかなと思う。
- ・ また、中学校の先生の乗り入れによって小学校の先生達に空き時間が生まれたこと、児童・生徒達にとっては、担任の先生との閉鎖的な1対1の対話ではなく、学年を超えた対話ができ、双方にゆとりができたことが「学校が楽しい」ことに繋がっているのではないかなと感じた。
- ・ 9年間を通した学習指導で教育効果も大きいと思うが、児童・生徒達の「学習のつまずき」については、9年間のカリキュラムでどのようにフォローアップしているのかお伺いしたい。

菊田教頭

- ・ 先ほど、学習の形態について、より対話的なものにし、学び合うことで、45分授業の中で授業の質を上げていくことにチャレンジしていることをお話させていただいた。
- ・ しかし、どうしても個人差というものがあり、授業の中できちんと理解が定着できない場面もあり、それに対しては、毎週木曜日に、「ふたばタイム」という学習の時間を取っている。

前期課程と後期課程で取り組み方には差異はあるものの、プリントを解けたら帰れる仕組みであるが、担任一人では全員の採点ができないことから、授業のない教職員も一丸となって対応し、一人一人の学習状況を把握するとともに、基礎学力の定着の向上を目指している。

- ・ また、大崎市では、学力向上に向けて、長期休暇前の7月・12月・2月に1週間の「学び直し期間」を設けており、当該期間には、市が実施する標

準学力テストや全国学力テストの結果を反映し、解けなかった問題や単元について授業時間を使い、改めて学習している。

- ・ さらに、大崎市が導入している「タブレットドリル」や、本校が導入している「A I ドリル」により学習に取り組んでおり、教員の採点は不要で、解答状況がデータ化もされることから便利である。

なお、夏休みの課題については、毎週月曜に配信されることから、夏休み当初に宿題を終わらせることはできなくなるため、毎週計画的に学習することとなる。

【宮澤委員】

- ・ 学習のつまずき解消には、アナログ部分とデジタル部分を併用しながら取り組んでいることがわかった。
- ・ 今日の義務教育学校の取り組みを聞いて、異学年交流などによって、フラストレーションの分散になり、精神的にも身体的にも健全な学びになると感じた。
- ・ 本市に義務教育学校はないが、今日のお話を聞いて、小・中学校の連携は非常に大事だと感じ、義務教育学校の取り組みをヒントに、教職員の研修において積極的に意見交換を行ってほしいと思う。
- ・ また、四倉地区のこれからの学校づくりについては、分離型ではなく、小・中学生が互いに顔が見られるようなハード面の工夫が必要だと思う。

【小峰委員】

- ・ 大崎市初の義務教育学校ということで、課題をどうしたら解決に向かっていくのかということをしっかり考えながら開校したのだと感じた。
- ・ また、日々生じる課題についても修正しつつ今後に向かっている先生方の素晴らしいパワーをすごく感じた。
- ・ 現在、いわき市においても課題となっていることが「登校しぶり」や「不登校」であるが、古川西小中学校における状況や対応をお伺いしたい。
- ・ また、義務教育学校では、小学校と中学校の教員免許のどちらも必要だが、「教員のなり手不足」についてお聞かせ願いたい。

菊田教頭

- ・ 登校しぶりや不登校については、本校においても在籍している。
- ・ やはり、統合前に児童・生徒達の環境が変わることは危惧しており、少人数で全員顔見知りの環境から大人数になることで不適応を起こす児童・生徒が出ることは考えていたが、統合したからといって急に不登校数の割合が増加したということではない。

- ・ このため、一般の学校で実施しているように家庭と連絡を密に取り合いながら、児童・生徒の気持ちに寄り添って対応するところは、義務教育学校であっても、通常の公立の小・中学校であっても変わらない。
- ・ 学校に来られるときは2時間でも来てもらって、最低限の学力保障の仕方を話し合いながら対応している。
- ・ 文部科学省においても、「不登校は問題行動ではなく、発達の一過程に見られる要素の一つである」と捉え方が大きく変わっていることから、児童・生徒達の気持ちを大事にした対応をしている。
- ・ ただ、それにあたって、本校は義務教育学校として開校して2年目ではあるが、生徒支援会議において、登校しぶりや不登校の傾向の児童・生徒の情報共有も行っていることが本校の強みであると感じている。

猪股校長

- ・ 教育のなり手不足の要因は、やはり、「働き方」だと思う。
- ・ 校長としてできることを考えると、今年度の5月に、教職員本人がリフレッシュしたいときに休めるよう、計画年休を取得できる環境づくりを打ち出した。
- ・ これを実行するには、朝の会などに誰が行っても同じことを、同じようにできるシステムを学校で確立する必要がある。
- ・ また、いろいろな先生が対応することにより、「全職員で児童・生徒を見る」という相乗効果もある。
- ・ 前任校でも教職員が少しでも働きやすく休める環境づくりに取り組んできたが、やることを前提にどのようにしたらみんなでできるかを考え、改善する工夫をし、あとはやるだけの勇気があるかどうかということである。
- ・ 私はいいことであれば5年後 10 年後にそのシステムが残るだろうと思っている。今は、いろいろなことに挑戦してみることが必要だと思う。

【市長】

- ・ 教育現場も大変で、学校ごとに課題は違うと思うが、風通しをよくし、よりよくするためにみんなで議論しようという動きを常に前進させ、試行錯誤していく姿勢が素晴らしいと感じた。

【教育長】

- ・ 4月に一度学校に訪問し猪股校長及び菊田教頭のお話を伺った際、学校のシステムの良さも感じたが、それ以上に先生方の雰囲気の良い学校だと感銘を受けた。
- ・ 市長が話したように、現代の児童・生徒には6－3制が合わなくなっている。
- ・ 全国的な課題だが、不登校は、中学生になると人数が急激に増えている。

- ・ 本市の学力向上の面では、同じ児童・生徒を追跡調査しても、小学校では割と伸びていても、中学校になった途端に伸び方が緩やかになる。これは、福島県の特徴の動きかもしれないが、やはり、中1ギャップの環境の変化の影響があるのかと思う。
- ・ また、児童・生徒達だけではなく教員側の方も、やはり中学校段階での文化が影響していると思う。
- ・ 私たちもこれらに様々な手立てを行うが、学校のあり方から変えて、それがきっかけになってうまくやっていくことも大事だと思う。
- ・ 中1ギャップの解消や、教員間の日常的な交流については、まさに実現しやすい取り組みだと思う。
- ・ ただ、義務教育学校は素晴らしいシステムだが、どこでもできるというものでもないと思う。

やはり一つの建物、一つの敷地に学校があってこそその義務教育学校であり、今離れている小・中学校を義務教育学校だけのために建て替えることは現実的ではない。

- ・ 物理的な限界はあると思うが、小・中学校を統合するタイミングがある場合は、義務教育学校は非常に可能性のある学校系統であると思う。
- ・ 本市では、義務教育学校という事例がないことから、私たち教育委員会事務局にしてもやはり躊躇してしまうところがある。
もちろん、メリットもあればデメリットもあるだろうという前提で物事を考えてしまうが、猪股校長がおっしゃったように、「可能性があるならばやってみよう」という気持ちが大事だなと思った。
- ・ 直近の計画は、四倉地区の市街地再生整備計画だが、義務教育学校を軸に考えていければと思う。
- ・ しかし、システムだけではなく、猪股校長が体现されている教師としての気概や、職場をどのように改善するかという気持ちが大事ということが今日一番勉強になった。

【市長】

- ・ 今日、「義務教育学校」をテーマに、大崎市立古川西小中学校からお話を聞かせていただいたが、義務教育学校の仕組みだから良い実践になっていることではなく、校長先生や教頭先生のリーダーシップや、学校の雰囲気、行動に移し試行錯誤を行うといった教職員の気概や姿勢が非常に必要であると感じた。
- ・ 市内においても、教員組織は別々であるが、三和や草野の小・中学校のように同じ敷地に学校があり、小中一貫教育に近いようなところもあることから、完全な義務教育学校でなくとも既存の枠組みの中で、良い実践である義務教育学校のエッセンスを取り入れながら連携して取り組むこともできると思う。

- ・ また、小・中学校が距離的に離れていても、デジタル技術を用いて、遠隔でも繋がれるなどの工夫ができるのではないかと思います。
- ・ 今日お話しを伺った実践例のエッセンスを酌み取りながら、いいモデルを作っていきたいと思う。また、教職員と共有しながら、どのようなチャレンジができるのかを考えていくことが必要であると改めて実感した。

3 閉会

【署名】

服部 樹理
阿部 武彦